

Letters to the Editor

IAEA 中級コース、バンコックで開催

本年1月17日から4週間にわたりバンコック市の熱帯医学部において開催された IAEA およびタイ国政府共催のラジオアイソトープ学校に参加してきましたので、その経験を簡単に報告したいと思います。

IAEA はご承知のごとく国際原子力機関 (International Atomic Energy Agency) のことで原子力の平和利用のために設けられた国連の下部機関です。その中に医学部門があって、ラジオアイソトープ (RI) waste 处理の研究、測定機器の検定と標準化等を行なうとともに、種々の講習会開催、資金提供や指導者派遣による各個研究の後援等を行なっています。今回の学校、Advanced Training School on Medical Application of Radioisotopes は、すでに10年もの間例年行なわれてきた各種講習会の1つとして立案されたものです。若手は将来の進路が不確定なこと、指導者層は多忙で出席の時間をさき難い等の経験から、今回はじめて中級コースを計画してみた由です。

参加学生20名の中6名は地元タイから、残りはアジア各国からで、日本からは大阪市立大衛生の笠原明氏、東北大小児科の千葉良氏および私の3名、フィリピン・トルコ各2名、韓国・台湾・南ベトナム・ビルマ・イラク・マレーシア・香港各1名で、内訳は放射線科医12名、内科医6名、その他2名。大多数が各部門の中堅責任者クラスでした。トルコの原子力医学会はすでに15年の歴史を有し、比・韓両国の核医学会も各4年を経過していたのには少々驚きました。近い将来に東京あるいはバンコックあたりでアジア地区核医学会を開く条件が熟しつつあると思われます。校長は熱帯医学部学部長で、寄生虫学者の Chamlon Harinasuta 教授で、タイ国政府との接衝、会場、宿舎等一切の企画・運営に当られ、IAEA 科学顧問の E. H. Belcher 博士が校長を補佐して教育内容や講師陣の選定をされた模様です。講師陣は一流の学者を迎えておりその一部をあげますと、Dr. Swindell, Dr. Hine らの医用物理学者や Dr. Wagner, Dr. Brownell, Dr. Jeejeebhoy, Dr. Bothwell, Dr. Szur, Dr. Goolden らの専門家の他にタイ国その他の RI 専門家の講義がありました。講義の後の討論も活発でした。

講習内容は第1週は RI 研究室の設計や組織、RI の取扱い、照射量測定、液体シンチレーションカウンター、摂取量測定、ホールボディカウンター等の RI 測定法一般について、第2週はスキャニングの原理と応用、第3・4週はトレーサー手技の原理から各論的応用に入り、水・電解質、腸管吸収、たんぱく質合成とその腸管からの喪失、 ^{99m}Tc ・葉酸、各種貧血と関連して鉄代謝および赤血球寿命、甲状腺機能検査、RI の治療への応用等でした。オートラジオグラフィーや代謝に関する講義はもっとあってもよいように思われました。Advanced Training School の名にかなり高級かつ難解な講習を予想して参加したのですが、従来の成果の解説が主で、十分に練られた分りやすい講義が大部分でした。

タイ国側の準備も十二分になされており、第1日には厚生大臣も自ら開校式で挨拶され、晩餐会へも出席され予想以上の歓迎でした。IAEA 発行の多数の参考書とスケジュール表とが初めて各人に配られ、毎日下校時に翌日の講義のプリントが予め渡されます。医科大学附属病院である Siriraj Medical School, Chulalongkorn Medical School をはじめとして SEATO Lab. や Priest Hospital, Woman Hospital, タイ AEC などの見学も講習の一部に組込まれ、この国の核医学の発展を支えている多くの人、多くの職場に接することができました。休日には市内や郊外の名所案内があって、われわれ外国人には有難いプランでした。

4週間にわたり行動を共にする間に、他の参加者から、日本製の医療機器（スキャナー、心電計から小は disposable の注射器まで）について質問やら購入の相談やらをうけました。日本製品は安いだけでなく性能もよいことが認められてきています。ただ使用経験がないこと、紹介の不足、サービスの保証などの問題から、やむをえず高価な米英製品を使用しているのだといいます。多くのアジア諸国は歴史も若く、医師も機械も不足しており、しかも国家建設の意気は高く、日本に対する期待は大きいようです。わが国の特殊な位置を思う時、私どもの眼を欧米一辺倒からアジアの友邦にも向ける必要がありはしないかと感じた次第です。

東京大学上田内科 篠野脩一